生涯学習だより

春号

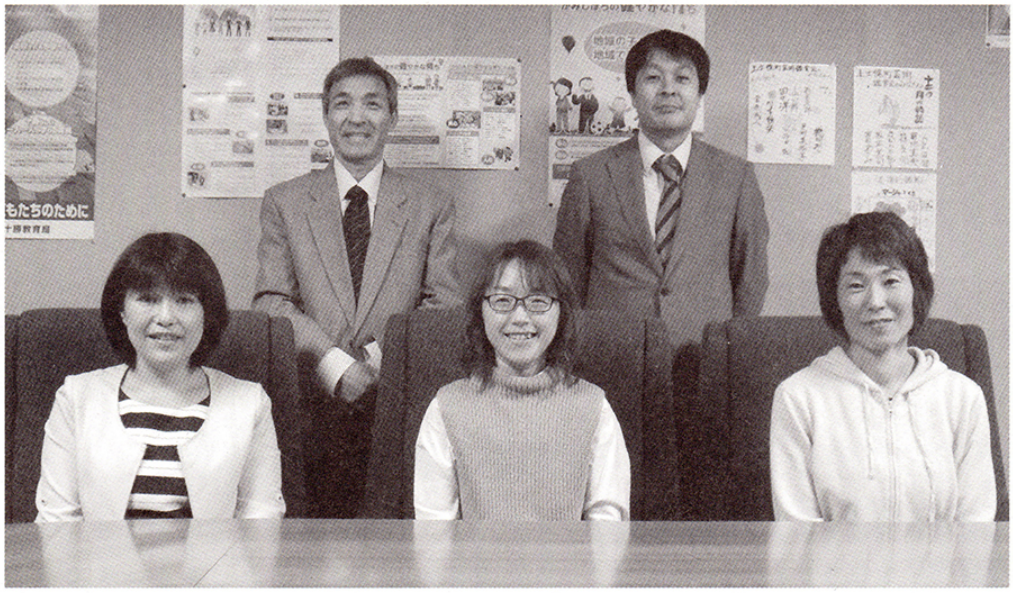
夢心（ゆめごころ）～「夢ふくらます【はる】…ふくらむ夢と希望」

～かみしほろの健やかな育ち～

年間テーマ 「わが町の教育」

生涯学習情報委員紹介

本年度の生涯学習情報委員はこの五名です。昨年度に引き続き「わが町の教育」をテーマに、発信していきます。



後列左から田中委員、石川委員
前列左から西垣委員、杉森委員、森田委員

外に出たいのは子供だけじゃない

四月のある日。小学四年生の息子が友達とプラスチック製の剣を片手に家の中を上へ下へと走り回る。「家の中で暴れるな！外で遊ばんかい！」と一喝した私に息子が反論。「だって、自転車で公園めぐりしたけど、遊べるところ少ないんだもん」…ごもっとも。雪解け間もないこの時期、芝生の公園は、足元が安定せず水もしみこんできて使えない。ある公園では遊具で遊んでみても、ほとんどが幼児用なので、体を持て余す。実は私も、家の中以外で一緒に過ごせる場所が欲しいなと数年前から思っているところ。

例えば、町内中心部、子供が自分で行ける距離にあり、赤ちゃん連れの親子から、年配の方までが同時に利用できるような大きな公園があるとする。イベントなど何もなくても、暇な時間を贅沢に使える公園が。駐車・駐輪用の他にもアスファルト部分が多く、ベビーカーを押して歩けたり、自転車やキックボードの練習ができたり。ラジコンカーを競わせるスペースがあったり、バスケのゴールがあるとまた楽しそう。アスレチックがしたい、というのは息子の希望。芝生ではキャッチボールや、フリスビーで遊んで、疲れたらあずまやで休む。水の流れる設備があれば、流れるさまを見たり、水の音を聞きながら、ベンチで読書するのもいい。自分の好きな花苗を持ち寄って花壇を作れば、ガーデニング好きな人の会話のネタになるかな。

想像だけならタダなんだけど…。せめて現存する、ただ芝生だけが広がる公園が、もう少し使い道を広げられるようになれば、と思うのは私だけかなあ。

（杉森　恵子）

「育ち」のための時間

四月から中学一年生の単学級クラスの副担任になりました。新卒 一年目の若い男性教師が初担任を持つクラスです。初々しい日々に寄り添いながら、子供達と先生、双方の変容を促していくポジションの仕事を、肩に力を入れずにやっていく一年にしたいと思っています。

入学式の後は、生徒と保護者が皆教室に入り、一十分ほどの短い最初の学活があります。担任のお披露目ですね。傍目で見ていて気の毒になるほど緊張している彼の船出を直視できない（笑）。でも彼の最初の話は素敵でした。

ふーっと一つ息をつくと、全体を見て、彼はこういいました。

「僕は君達に会うのを十年前から楽しみにしていました。高校生の時に先生になろうと決めた時から、この日を楽しみにしていて、今日、君達に出会って感動しています」

その瞬間、みんなが吸い込まれるように彼の話を聞き入ったと、僕には感じられました。彼は大丈夫だな、きっと素敵な 年を過ごせるに違いない、そう思って安心して教室を離れました。

先日、福島県相馬市の高橋尚幸先生という方の教室を一日訪問しました。前夜から泊りがけで行き、尚幸さんと呑みつつ話をしました。前年度まで大変な荒れの中にあったという教室ですが、子供達の話し言葉や子供同士の関わり方はまだ荒らっぽいけれど、でもずいぶん落ち着きを取り戻してきていると感じました。学校がスタートして か月です。

尚幸さんと大切な話をいくつもしましたが、そのうちの つは、教師も保護者も地域も待てない、という話でした。子供（子供集団）というのは劇的に変わったりしないのです。劇的に変わったら何らかの権力的な行使があったと疑った方がいいくらいです。子供（集団）は少しずつ少しずつ変わっていきます。変わる前には大きな沈み込みがあってぐだぐだダメダメな時などもあります。結果主義、成果主義の時代で、その辛抱の時期を教師も保護者も地域も待つのが苦手になりました。子供（集団）に内在する力を信頼してじいっと待つ、人を育てるという事は昨今のスピーディな時間の流れとはいささか違う時間を生きながら進めていくものだと、そういう話でした。

若い担任が将来、この地域の教育を支えていく屋台骨の一人に、子供達と共に育っていけるといい。それをみんなで支えていける町だといいなあと考えます。上士幌町なら、それができるのではないかなと、住民の一人として感じてもいます。

（石川　晋）

私の高校生の思い出（その一）

私が地元の高校に入学したのは昭和四十年四月でした。当時は普通科 一クラスと定時制農業科一クラスがありました。私は農業科に入学しました。夏季期間は週 日登校、残りは自宅で親の農業体験、冬は普通登校。四年間通い続けました。

夏季期間は自転車、冬季期間は歩いて五キロメートルを一時間かけて通学しました。たまに登校するので眠いのを我慢して授業を受けていたことを覚えています。

高校 一年生になると十六歳から自動 一輪の免許が取得できたので、通学はオートバイに乗り、楽になりました。冬でも格好をつけて、寒いのに下防寒着をはかずに乗っていました。

毎年行われる学校祭では、全校生徒十 一クラス中 年連続最下位でした（今まで、農業科一年生が通例でした）。また、スケート大会や予餞会も楽しい思い出として残っています。

（田中　松雄）

新校舎

第１回　修学旅行

上士幌へ移住して二十三年～北門小学校閉校で感じた事～

我が家は一十一年前、　才半と六か月の娘　人を連れ、家族四人で大阪から移住しました。場所は北門地区の離農住宅です。かねてから夫の夢であった農村留学の里親をしたいというのと、私は子供を育てるなら都会よりも田舎が良いと漠然と考えていたのが理由です。農村留学というのは、都会の子供達が一年間を通して農村生活を体験するというものです。学校も地域の学校に通います。

子供が六人に増え、　十　年経って改めて思うのは、この北門で育児ができて本当に良かったということです。我が家では、敷地内で何種類もの山菜が採れます。馬、牛、ヤギ、羊、ニワトリ、犬、猫（かつてはブタ）も飼い、家庭菜園で野菜を作り、思い描いていた田舎暮らしを子供達と一緒にしてきました。

さて、大阪育ちの私がまず感じたのは、北門小学校が私の通っていた小学校と全く違っていたことです。私の出身校は、全校生徒が一千人以上もいるマンモス小学校でした。運動会は平日に行われ、給食はいつもどおり教室で食べていました。家族は観に来ていたのかもしれませんが、記憶にありません。北門小学校では運動会が「北門地区連合大運動会」という名のとおり、小学生のみならず保育所、地域の地区対抗運動会が同時に行われます。地区対抗では幼児から御年配の方まで参加し、私も毎年筋肉痛になるほどの競技が、児童競技の間に組み込まれていました。そしてお昼には何よりも子供達が楽しみにしている、家族のみならず親戚と囲んで食べるお弁当です。青年団が焼鳥、飲み物、くじ屋を出店し、ちょっとしたお祭りのようです。

もう一つ大きな行事が学芸会です。私は学芸会というのを北門に来るまで知りませんでした。こちらも保育所、老人会や母の会の出し物が組み込まれています。児童は自分達の出番の合間に照明や裏方の仕事をやっていて休む暇もないほど、大活躍です。そして運動会同様、お昼は家族皆で囲むお弁当です。

冬になって驚いたのは、グラウンドがお父さん方手作りのスケートリンクになることです。そして放課後・冬休みとほとんど休みなく少年団活動としてスピードスケートの練習をします。しかもオリンピック選手のような格好で。始めは、うちの子達はこんなことはできないと思っていました。しかし小学校敷地内にある保育所に通い、送迎の時、目の前にリンクがある環境でしたので子供にせがまれ一歳からスケートを履いたのがきっかけでスケート熱心な家族になっていました。

このような地域に根差した学校でしたが、一十一年前、農村留学生がお世話になり始めた年には四十名以上いた児童数が十年程前から十数名になり、これまで行われてきた行事が成り立たなくなってきました。あんなに盛んだったスケート少年団がなくなり、学芸会は午前で終わるようになってから、地域の方々の出し物、お弁当タイムがなくなりました。運動会では、児童の競技全てが全校競技になり、地区対抗は人数が確保できず、負担が大きすぎる行事になっていました。離農と高齢化が進み、時代の流れを毎年痛感しました。

上士幌小学校との統合については、十年程前から町より説明会が繰り返されましたが、始めは話がなかなか前に進みませんでした。小学校は地域の象徴だったからです。しかし同級生がいなかったり体育や音楽などの授業が限られてくるなど子供のことを考えると、上士幌小学校で人数がいることにより可能になるプラス面を考え、ようやくこの春に統合するに至りました。上士幌小学校は手厚いサポートで北門児童を迎えて下さり、子供達も心を打ち解け始めたようです。北門小学校ならではの行事はできなくなりますが、北門小学校でできなかったことが上士幌小学校で沢山できると思います。末の双子も上士幌で育児ができて良かったと思える日が来るのを確信しています。良い土地で育った力強い作物のように。

道外で働いている上の娘達が帰省すると、その辺の景色を見て「きれい！きれい！」と連発します。私も越して来た頃にはそう見えていましたが「何が？」と思う程、当たり前になってしまいました。上士幌の当たり前に他にはない自然の美しさがあります。そして力強さがあります。これからもこの恵まれた環境を再認識し、子供達と共に成長してゆきたいと思います。

（森田　久美）

進め！食育！

食育がささやかれてから、そろそろ十年となるだろうか。娘が小学校に入学したこともあり、学校ではどんな食育が行われるのか、楽しみにしていた。上士幌小学校では、たくさんの取組がある。まずは、学年ごとの学校農園だ。農作物を数種、種から植え、収穫、試食を体験する授業を、毎年繰り返し行っている。経年で学習することで、色々な作物との出会いがあり、それぞれの特性や種の違いから成長の違いまで、育てる難しさも学習している。収穫した農作物をみんなで試食する。しっかりと味を覚え、楽しかった記憶として心に刻まれる。野外授業も多い。子供達が農家へ出向き、芋やとうきびの収穫体験を行う。農家のスケールと苦労を目の当たりにすると共に、地場産の食物について学ぶ。収穫した作物を、好きなだけ持ち帰れるとあって、子供達はビニール袋いっぱいに詰め込む。学校から自宅までの道のりで、収穫後の運搬の苦労も体験する。野外での授業もある。春には山菜採り、秋には笹茶作りや落ち葉拾いが行われる。食べられる山菜と食べられない山菜を実際に目で見て学ぶ。上士幌にあの有名なトリカブトが存在し、ヨモギとは葉の裏を見て選別する事を、私は学校の野外授業から戻った娘に教わった。夫とケンカの際には、間違ったフリをして、というのは冗談として、山菜の収穫後は天ぷらとして食す。春の味を体感するのである。また、熊笹を集めて炒る、笹茶作りの授業も盛んで、学童保育所においても、通年手作りの笹茶を子供達が淹れ、熱々を飲んでいる。数々の素晴らしい授業に頭が下がる。

方、学校内で食育に一番近い学校給食での食育への取組を、耳にしないことが気にかかっている。というのも、毎年行われる給食試食会で、とても残念な光景を目にするからだ。残食である。給食時間が終了すると、次々と子供達が残した給食を捨てる。特に牛乳の扱いは理解しがたい。全く手つかずの牛乳を、捨てるためだけに開ける。そして当たり前のように、ドバドバと食缶へ捨てていく。手つかずのものを躊躇なく捨てる行為に違和感を覚える。現在、給食の持ち帰りは禁止されている。牛乳を飲むことができない子供は、毎日捨てるためだけにパックを開けるのだ。そして、食缶へと捨てる。牛乳を捨てた後は、パックを開き綺麗に洗う。ストローを別にする。ゴミの分別とリサイクルの教育は行き届いているようだと、皮肉も出てきてしまう。

ある学校では、牛乳を給食と一緒に提供することをやめた。中休みと呼ばれる少し長い休み時間を、牛乳の時間に当てたのだ。『ドリンクタイム』と名付けられた。給食の時間に牛乳を飲むことで摂取量が増え、肝心のご飯やおかずを残してしまう。それを回避するために考えられた。給食の短い時間で、みそ汁と牛乳を合わせ約四百ＣＣの液体を飲み、更に給食を食べる。特に胃の小さい低学年には厳しい。牛乳の時間を別に設けることで、子供達は無理なく摂取でき、牛乳の苦手な子への対応も、時間に余裕を持って行える。更に途中に牛乳を摂ることで、脱水の防止につながると考えられている。しかし、それも賛否両論、『ドリンクタイム』にたどり着くまでに、たくさんの意見交換がなされた。試験運用としながら、牛乳自体の停止も行った。結果、カルシウムの摂取量の低下を、他の食品で補いきれないと分かり、牛乳の底力を見せつけられる結果ともなった。

なぜ、上士幌は給食での食育に取り組まないのか、残念に思っていた最中に、小学校の学級通信に、こんな記事が載った。『（おねがい）四月から給食の状況を見ると、牛乳の残りが非常に多いです。苦手な児童が多いのだと思います。そこで苦手な子に限り「コップを持参する」という特別ルールを作ります。そうすることで、コップに入れて少しでも牛乳が飲めるようにし、残ってしまうムダを最小限に抑えることができると考えました。お手数をおかけしますが、苦手な児童のご家庭はプラスチックのコップの準備をお願いします。』

上士幌にも食育の芽が芽生えている。学級通信を読み終え、ホッとする。小さい取組だが、素晴らしい取組である。もしかすると、この取組を実行しても、残食の量はあまり変わらないかもしれない。しかし、この取組を実行することで、少なくとも子供達の意識は変わる。このクラスの先生のように、食物を大切にする心持ちや感謝の気持ちを、キチンと持つようになることだろう。まさに、食育である。今後もこのような取組が、続けて実現するよう願う。少なくとも、食べて物を捨てる教育は中断させたい。しかし、アレルギー、食品衛生法、学校給食施行規則、その他モロモロの問題が立ちはだかる。牛乳　つとっても大問題だ。だからこそ、たくさんの知恵が必要なのだ。ベースである残食の調査と、生徒、父母へのアンケートや意見の収集、意見交換会の開催が、近いうちに行われることを期待する。上士幌の食育が、もっともっと進んでいくように、心から願っている。

（西垣　知子）